

青年期におけるアタッチメントスタイルの違いと 恋人に対する依存との関連について¹⁾

片岡 祥²⁾
園田直子³⁾

要 約

本研究は、恋人に対する「依存」のしやすさとアタッチメントスタイルとの関連を検討したものである。被験者は大学生123名（男性53名、女性70名）であった。25項目からなる恋人依存尺度を因子分析したところ、「恋愛不安」と「恋人中心」の2因子が見出された。そして、恋人版に修正した30項目からなる一般他者を対象としたアタッチメントスタイル尺度（ECR-GO）を用いて参加者を4群に分類し、「恋愛不安」と「恋人中心」の2因子の得点の違いについて比較したところ、恋人にもっとも依存するのはとらわれ型、もっとも依存しないのは拒絶型であった。また、恐れ型と安定型を比較すると、両型とも「恋人中心」に差はなかったが、恐れ型は「恋愛不安」が高く、安定型は「恋愛不安」が低かった。その結果、恋人に対する「依存」には関係に対する不安と恋人を中心に考える程度という2次元があり、アタッチメントスタイルの違いが恋人に対する「依存」の程度を予測できることが示唆された。

キーワード：アタッチメントスタイル、恋愛における依存、青年期

問題と目的

青年期の恋愛は、詫摩（1973）や加藤（1987）によれば、青年が成長する大事な契機であり、恋愛を通して人間的に成長するための重要な経験であるとしており、Havighust（1943）も青年期の発達課題に異性との深い関係を挙げている。また、青年期の恋愛関係は親子関係からの依存—分離—独立という、乳幼児期からの親密な関係性の変化の中においても位置づけることができる。Hazan & Zeifman（1994）の調査によると、青年期までにおいて親密な関係の対象が、親から友人・恋人へ移行していくことを見出している。

これらのことを踏まえれば青年期の恋愛および恋愛関係とは、他者を自ら選択して親密な対人関係を形成

していく過程であるといえ、そのような過程を経験することによって、心理的離乳やアイデンティティの確立といった青年期における発達課題を達成する契機の1つになると考えられる（図1）。

青年期の恋愛関係を親密な他者との情緒的な絆という観点から、近年アタッチメントという枠組みで捉えようとする研究が増えている。アタッチメント理論とは、Bowlby（1969/2000, 1973/2000）により提唱された理論で、乳幼児期の親密な2者関係を通して内的作業モデルと呼ばれる心的表象が形成され、そしてこの内的作業モデルを用いて関係性を構築していく結果、後の青年期の対人関係にまで影響を及ぼすとされている。

青年のアタッチメントスタイルには個人差が存在す

1) 本研究は第67回九州心理学会において発表されたものです。本研究を発表するにあたり、久留米大学文学部卒業生の今田珠美さんにデータ提供と多くの助言を頂いたことに感謝を申し上げます。

2) 久留米大学大学院心理学研究科修士課程

3) 久留米大学文学部

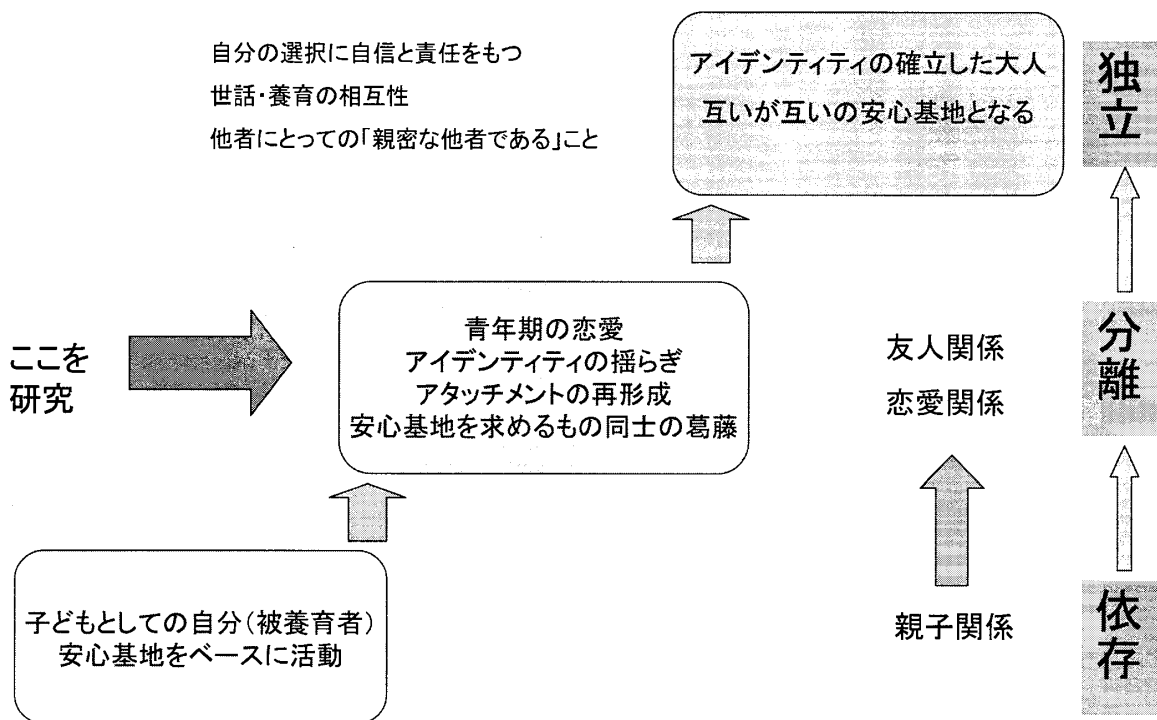


図1 青年期における恋愛の位置づけ

るとされている。Bartholomew & Horowitz (1991) によれば、成人のアタッチメントスタイルとは、自己モデルと他者モデルという2つの軸があり、それぞれのモデルがポジティブかネガティブか、それらの組み合わせによってアタッチメントスタイルを「安定型」、「拒絶型」、「とらわれ型」、「恐れ型」に分類されている⁴⁾。さらに、Brennan, Clark, & Shaver (1998) らによれば、この自己及び他者モデルは、より具体的な概念である「見捨てられ不安」ならびに「親密性の回避」という次元として理解することができる(図2)。

青年期の恋愛関係をアタッチメントという観点から捉えた研究には、Hazan & Shaver (1987), Shaver & Hazan (1988) の研究がある。彼女達は自身の研究から青年期においてはアタッチメント対象が乳幼児期での母親から恋人へ移行すること、さらに母子関係と恋愛関係にはいくつかの共通点があることを指摘し、恋愛関係は、互いに情緒的な結びつきを形成する

ようなアタッチメント関係であると定義づけた。そして、これらの研究をきっかけに青年期の恋愛関係をアタッチメントという観点から捉える研究が増えることとなり (e.g. Feeney & Noller, 1990; Bartholomew, 1994; Collins & Read, 1990; Feeney, 1999; Simpson, 1990; Hendrick & Hendrick, 1989; 金政・大坊, 2003 金政, 2006), 青年期の恋愛関係をアタッチメントという観点から予測することの妥当性が実証されている。

しかし、青年期の恋愛関係をアタッチメントから捉えた研究の多くは、恋愛関係の諸変数をアタッチメントスタイルの違いという観点から検討しているに過ぎない。乳幼児期から青年期へとつながる親密な他者との情緒的な絆、という観点から恋愛および恋愛関係の意味や意義というものについてより議論が交わされるべきではないだろうか。

青年期の恋愛関係を乳幼児期と対応させるために Zeifman & Hazan (2000) の研究にふれておきたい。

4) 4分類アタッチメントモデルにおける各タイプのプロトタイプは以下の通りである；安定型（自己観ポジティブ；他者観ポジティブ）—親密な人間関係を大切にする，個人的な自律性を失うことなく親しい関係を維持する能力がある，対人関係やそれに関わる問題を議論するとき一貫性があり思慮深い。拒絶型（自己観ポジティブ；他者観ネガティブ）—親密な関係での重要性を過小評価する，情動性が制限されている，独立性と自律性を重視する，対人関係について議論する時明瞭さや信頼性に欠ける。とらわれ型（自己観ネガティブ；他者観ポジティブ）—親密な関係に過剰にのめり込む，自分の幸福感を持つ上で他の人の受容に依存している，対人関係について議論する時一貫性がなく情動を大げさに表出する。恐れ型（自己観ネガティブ；他者観ネガティブ）—拒絶されることへの恐怖，自分の安全感，他者への不信任感から親しい関係を回避する（加藤，1998/1999）。

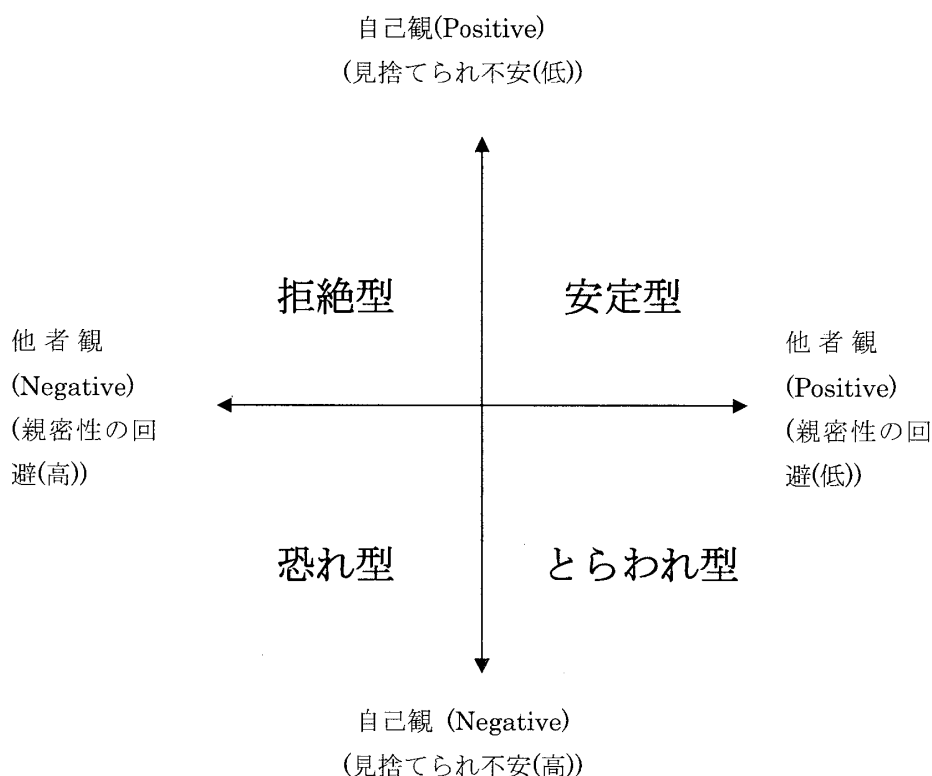


図2 Bartholomew & Horowitz (1991) の4 カテゴリーアタッチメントスタイル

Zeifman & Hazan (2000) の研究では、乳幼児期のアタッチメントと同様に、青年期の恋愛関係には4つの特徴（近接性の維持・安全な避難場所・分離不安・安心基地）が見られるとし、これらの4つの特徴がある段階では上下しながら最終的に安全基地の段階に到達するとしている。これらを踏まえ、片岡・園田 (2008) ではアタッチメント理論を元に青年期の恋愛を“安心基地を獲得する過程”と定義した。

青年期の恋愛関係の進行について、松井 (1990) によれば、“出会い→進展→深化”という過程を辿っている。青年期の恋愛が“安心基地を獲得する過程”とするならば、“出会い”の部分である恋愛関係の形成とは安心基地の形成と置き換えることができるだろう。また、“進展”の部分である、恋愛関係内で起こる現象とは安心基地を維持・発展・安定化するためにとりうる方略であるといえる。最後の“深化”とは恋愛関係がより高次の関係へ発展的に解消する部分といえ (cf. 友愛関係, 夫婦関係), 安心基地の安定化としておきかえることが可能であろう。そして、これら全ての段階において、恋愛関係の喪失・崩壊が起こる可能性があるが、これらは安心基地の喪失・崩壊として置き換えることが可能であろう (図3)。

このような一連の恋愛関係をアタッチメントという

観点から捉えた場合、青年期においては、恋愛関係内で起こる特有の現象—安心基地を維持・発展・安定化するためにとりうる方略について注目することに恋愛関係の意味や意義を捉える1つの価値があると思われる。恋愛関係特有の現象が恋人との距離や不満など、関係性のバランスが崩れたときに調整する働きを担っていると考えられる。そして、このような恋愛関係特有の現象を体験することによって、自己が成長する一つの契機となるのではないだろうか。

恋愛関係特有の現象をアタッチメントの個人差として捉えた研究には、金政 (2006) にあるように、恋愛関係における排他性とアタッチメントスタイルの違いを検討したものが、理論から予測される結果を得ている。このような個人差は、乳幼児期の親子関係から現在までにつながるアタッチメントスタイルの違いとして捉えることが可能なのではないだろうか。そこで、本研究では、親からの依存—分離—独立という過程を念頭におき、青年期の恋愛関係における依存とアタッチメントの個人差について検討する。

恋愛における依存とは、伊福・徳田 (2006) の定義によると、「一人でいることやパートナーがいないことに耐えられず、恋愛関係・親密な友人関係にある異性に過度に依存・依存しその人のために尽くす、ある

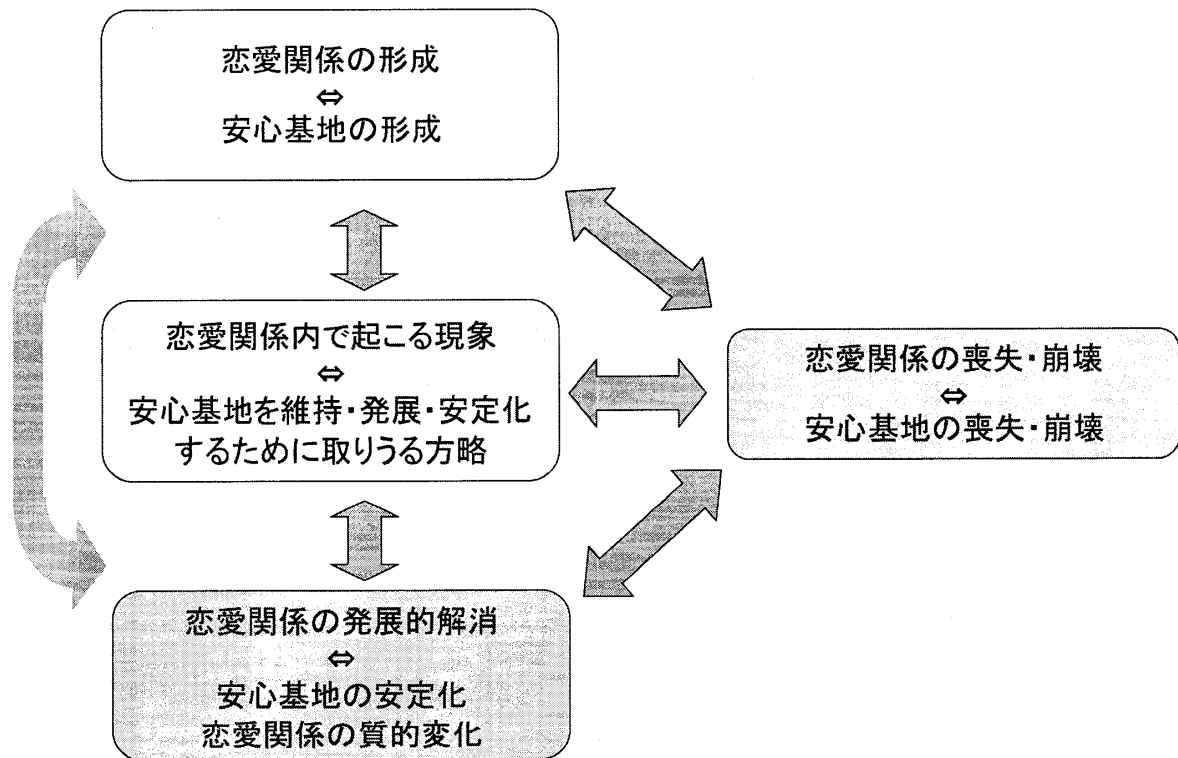


図3 本研究で扱う恋愛関係

いは見捨てられることを恐れ自己犠牲的な行動をとっている状態であるとされている。恋愛依存という言葉はネガティブなイメージを生みがちであるが、渡辺(2002)は依存を、互いに支えあうポジティブな相互作用をもたらす「よい依存」と、自身の安心のために他者をコントロールしようとし、結果苦しむことになる「悪い依存」に分けて捉えていることから、依存という概念には他者との関係を良好に保つ機能と、他者との関係を悪化させる機能という2つの意味合いがあると考えられる。つまり恋愛における依存とは、恋愛関係を維持していく上で、ネガティブな作用に働くこともあればよりよく関係を保つために働くこともある対人方略の1つであるといえるだろう。

恋愛における依存に関する研究は、主に質的な調査を中心に行なわれており、量的な観点からの検討はあまり多くはない。また、依存を測定するいくつかの尺度には、意識的な側面に焦点を当て行動的な側面を測定する項目が少ないこと、近年の恋愛は携帯電話が重要な役割を占めていると思われることから携帯に関する項目を入れる必要があること、一つ一つの項目は、より実態に迫るためにリアリティのある場面が想定される必要があること、などの理由から新たな尺度の作成が必要であるといえるだろう。

以上を踏まえた上で、本研究では乳幼児にとって親が情緒的に頼ることができる存在として機能する安心基地であるという点に注目し、青年期の恋愛関係を恋人が情緒的に頼ることができる存在として機能する安心基地を獲得していく過程であると定義する。そして、その過程でおこりうるであろうと考えられる青年期の恋愛関係における依存について、アタッチメントという観点から捉え検討することを目的とする。

方法

手続き

2006年6月、福岡県内の私立大学の講義時間を利用し質問紙調査を実施した。

分析対象者

大学生123名(男性53名、女性70名)

質問紙

1, 恋愛依存尺度: 恋人に依存する人はどういう気持ちを感じたり、行動をしやすいかを念頭においたものである(e.g. 服装や髪型などを恋人の好みに合わせる, 1日に1回は用もないけどメールを送る)。本研究ではこの尺度の得点が高いほど恋人に依存する傾向にあると見なした。6件法による25項目。

2, アタッチメントスタイル尺度: 中尾・加藤

(2004) によって作成された一般他者を対象としたアタッチメントスタイル尺度 (ECR-GO) を、恋人版に書き直したものをを用いた (e.g. 私は見捨てられるのではないかと心配だ、私は恋人と親密になることがとても心地よい)。青年・成人期のアタッチメント次元である「見捨てられ不安」と「親密性の回避」を測定する。6 件法による30項目。

結 果

1, 恋愛依存尺度の因子分析

恋愛依存尺度について、最小 2 乗解、バリマックス回転による因子分析を行った (表 1)。固有値の変化

と解釈可能性を考慮した結果、2 因子20項目が抽出された。第 1 因子には“自分が思っているほど恋人が自分のことを思ってくれてないのではと不安になる、電話やメールの返事が来ないと、自分のことをそんなに好きではないのではと不安になる”などの項目が集まったことから、第 1 因子を“恋愛不安” ($\alpha = .86$)、第 2 因子には“恋人ともし別れたら生きていけないと思う、日常生活で、恋人といない時でも、恋人のことをよく考えている”などの項目が集まったことから、第 2 因子を“恋人中心” ($\alpha = .85$) と命名した。2 因子による累積説明率は41.9%であった。

表 1 恋愛依存尺度の因子分析表

項目	恋愛不安	恋人中心	共通性
05 自分が思っているほど恋人が自分のことを想ってくれてないのではと不安になる	0.88	-0.01	0.78
14 電話やメールの返事がこない、自分のことをそんなに好きではないのではと不安になる	0.76	0.12	0.59
18 親しい同性の友人が、自分の恋人と仲よさそうに話しているのを見た時不安になる	0.67	0.18	0.48
04 恋人と別れないためなら、恋人のどんな嫌な要求にも従ってしまう	0.58	0.38	0.48
22 恋人からの愛情が、ほんのわずかでも欠けていると感じたときには悩み苦しむ	0.57	0.41	0.50
03 恋人が誰か他の人にも関心があるのではないかと疑うと、落ち着いていられない	0.50	0.28	0.33
08 急に恋人から会おうと言われて、予定が入ってもドタキャンして会ってしまう	0.48	0.36	0.36
02 恋人が自分を気にかけてくれない時、すっかり気がめいってしまう	0.48	0.40	0.39
16 2人の関係についての主導権は恋人が握っている	0.43	0.25	0.24
06 服装や髪型など恋人の好みに合わせる	0.40	0.35	0.28
24 恋人ともし別れたら、生きていけないと思う	0.03	0.70	0.60
21 日常生活で、恋人といない時でも、恋人のことをよく考えている	0.16	0.65	0.44
23 恋人のことを想うと、強い感情が突き上げてどうしようもなくなる	0.37	0.61	0.51
17 恋人中心の生活である	0.33	0.57	0.44
13 恋人に尽くすことが好きである	0.25	0.57	0.39
25 恋人がいない人生は物足りないと思う	0.11	0.53	0.30
20 ちょっとしか会える時間がなくてもそのちょっとしたためであつたら無理してでも会う	0.27	0.53	0.35
12 恋人とケンカや何か問題が生じた時、他のことは全く手につかなくなる	0.43	0.49	0.42
09 恋人の予定に合わせて自分の予定を立てている	0.11	0.48	0.24
15 1日に1回は、用もないけどメールや電話をして欲しい	0.30	0.43	0.28
説明分散	4.32	4.06	8.40
説明率	21.6	20.3	41.9

2, アタッチメントスタイルの違いによる恋愛依存の差異

恋人に依存する人はどのような人か、その個人差をアタッチメントスタイルの違いから検討した。まず被験者のアタッチメントスタイルを分類するために、アタッチメントスタイル尺度の2因子である“見捨てられ不安”と“親密性の回避”のそれぞれの平均点を基準点として、それらの高低の組み合わせにより、各被験者を安定型（低：低）、拒絶型（低：高）、とらわれ型（高：低）、恐れ型（高：高）の4つのアタッチメントスタイルに分類した。

次に、恋愛依存尺度についてアタッチメントスタイル間で違いがあるかを検討するために分散分析を行った。その結果、“恋愛不安 ($F(3,119)=36.06, p<.01$)”と“恋人中心 ($F(3,119)=19.85, p<.01$)”の両因子とも主効果は有意であった。HSD法を用いた多重比較の結果、“恋愛不安”では、とらわれ型/恐れ型が安定型/拒絶型よりも高く、“恋人中心”では、とらわれ型が最も高く、次に恐れ型と安定型が高く、拒絶型が最も低かった（表2）。

考 察

恋愛における依存とは、恋愛関係に対する不安と、恋人を中心に考え、行動するという二つの要素から成り立っているといえる。分散分析の結果、恋人に最も依存するのは“恋愛不安”、“恋人中心”得点の最も高かったとらわれ型であった。一方、恋人に最も依存しないのは“関係不安”、“恋人中心”得点の最も低かった拒絶型であった。また、安定型と恐れ型を比較すると、安定型は不安が低いにもかかわらず恋人中心であり、恐れ型は不安の高さから恋人中心の関係になっていることが示された。

本結果から、恋愛に最も依存するのはとらわれ型で

表2 アタッチメントスタイルにおける恋愛依存尺度の差異

		安定型 (n=33)	拒絶型 (n=31)	とらわれ型 (n=29)	恐れ型 (n=30)	全体 (n=122)	F 値	HSD
恋愛不安	M	2.79	2.64	3.83	3.59	3.19	$F(3,119)=36.06^{**}$	とらわれ型>恐れ型> 安定型=拒絶型
	(SD)	(0.47)	(0.53)	(0.49)	(0.62)	(0.73)		
恋人中心	M	3.59	3.02	4.40	3.78	3.68	$F(3,119)=19.85^{**}$	とらわれ型>恐れ型= 安定型>拒絶型
	(SD)	(0.66)	(0.66)	(0.71)	(0.67)	(0.83)		

N=123 **p<.01

あるといえる。逆に最も恋人に依存しないのは拒絶型であった。安定型と恐れ型はどちらも中程度恋人に依存するということがわかった。この2タイプの依存における差異は恋愛関係に対する不安であった。すなわち、恐れ型は関係を保つことに対する不安が高いため恋人を中心に考えているが、安定型は関係を保つことに対する不安が低いにもかかわらず恋人を中心に考えており、同じような恋人に対する依存の程度であってもその内実は違うようである。

まとめと討論

本研究は恋愛における依存を測定する尺度を作成し、作成した尺度を元に、恋愛における依存の違いについてアタッチメント理論の観点から検討したものである。その結果、【1】恋愛における依存とは“恋愛不安”と“恋人中心”という二つの要素から成り立っている【2】恋愛にもっとも依存するのはとらわれ型であり、恋愛にもっとも依存しないのは拒絶型である【3】恐れ型と安定型はある程度恋人に対して依存する傾向にあるが、恐れ型が関係に対する不安が高いのに対し、安定型は関係に対する不安が低いということが明らかになった。

本研究の結果から、恋人に依存するのはどのような者であるかをアタッチメントスタイルの違いからある程度捉えることができたといえよう。しかし、なぜ恋愛に依存する者もいれば依存しない者もいるのであろうか。1つの考えとしては乳幼児期の親子関係との関わりという点があげられるのではないだろうか。最も依存しやすいとらわれ型の親は乳幼児期においては、子の欲求に対する反応がずれていたり、必ずしも一貫しない応答をする傾向にあるという。このような親のもとで育った結果、人は頼れる存在であるという他者モデルと、自分の欲求に対して常に満たされるかどうか分からない、つまり自己が受け入れられるかどうか分からないという自己モデルを形成しやすい。このため、自己が嫌われるのではないかという感覚が他のタイプと比べて強く、過度に相手に依存してしまうのであろう。また、親に対する自己の欲求に対しても満たされない部分があり、そのような欲求が親子関係と類似した親密な対人関係である恋愛関係においても依存という形で表出している可能性がある。

本研究では、恋愛に依存するタイプについて検討したため、特にとらわれ型に注目しているが、その他のスタイルでも一定の結果が示されている。拒絶型の結果は、乳幼児期と同様に他者に頼らなくても自己を保

てるため恋愛関係においても依存しないのであろうという予測どおりの結果であった。興味深い結果となったのは安定型と恐れ型を比較した場合である。恐れ型と安定型はある程度恋人に対して依存する傾向にあるが、恐れ型が関係に対する不安が高いのに対し、安定型は関係に対する不安が低かった。恐れ型は近年追加されたタイプでまだ知見も少なく、乳幼児期との比較も難しいため断定はできないが、少なくとも安定型は受容的で応答的な感性の高い親を持つ傾向にあるので、恋人に嫌われるという予測もなく依存する必要もないのであるが、関係の維持のためにはある程度の依存が必要であるから適度に依存をすることで関係を調節している可能性がある。恐れ型と安定型の比較から、関係の維持のために依存がある程度必要であるというポジティブな側面が示唆された。

最後に本研究の課題を挙げたい。本研究で扱っているのは青年期の一時点における恋愛関係における依存の程度についてアタッチメントの個人差の観点から言及したに過ぎないため、過去から現在までのつながりという点は推測の域をでない結果となっている。今後は過去から現在のつながりをダイレクトにとらえるような研究が必要であろう。

引用文献

- Bartholomew, K. 1994 Intimacy-anger and insecure attachment as precursors of abuse in intimate relationships. *Journal of Applied Social Psychology*, **24**, 1367-1386.
- Bartholomew, K. & Horowitz, L.M. 1991 Attachment styles among young adults; A test of a four category models. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.
- Bowlby, J. 1969/2000 *Attachment and loss: Vol.1. Attachment*. New York: Basic Books. (黒田実郎ほか 訳 1976 母子関係の理論1: アタッチメント行動 岩崎学術出版社).
- Bowlby, J. 1973/2000 *Attachment and loss: Vol.2. Separation: Anxiety and anger* New York: Basic Books (黒田実郎ほか 訳 1977 母子関係の理論2: 分離不安 岩崎学術出版社).
- Brennan, K.A., Clark, C.L. & Shaver, P.R. 1998 Self-report measurement of adult attachment; An integrative overview. In J.A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships* (pp.46-76). New York: Guilford.
- Collins, N.L. & Read, S.J. 1990 Adult attachment, working models, and relationships quality in dating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 644-633.
- Feeney, J.A. 1999 Adult attachment and emotional control. *Personal Relationships*, **4**, 409-428.
- Feeney, J.A. & Noller, P. 1990 Attachment styles as a predictor of adult romantic relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 281-291.
- Hazan, C. & Shaver, P.R. 1987 Romantic Love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- Hazan, C., Zeifman, D. & Middleton, K. 1994 Adult romantic attachment, affection, and sex. Paper presented at the 7th International Conference on Personal Relationships, Groningen, The Netherlands.
- Havighust, R.J. 1943 Human Development and education. New York: Longmans, Green. (荘子雅子訳 1958 人間の発達課題と教育 牧書店).
- Hendrick, C. & Hendrick, S.S. 1989 Research on love: Does it measure up? *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 784-794.
- 伊福麻希・徳田智代 2006 恋愛依存傾向尺度作成の試み—男女間における恋愛依存傾向の比較— 久留米大学文学部心理学科・大学院心理学研究科紀要, **5**, 157-162.
- 金政裕司 2006 恋愛関係の排他性に及ぼす青年期のアタッチメントスタイルの影響について 社会心理学研究, **22**(2), 139-154.
- 金政裕司・大坊郁夫 2003 青年期のアタッチメントスタイルが親密な異性関係に及ぼす影響 社会心理学研究, **19**(1), 59-76.
- 片岡 祥・園田直子 2008 愛着理論をベースに恋愛関係の測定する尺度作成の試み—PRASS (Process of Romantic Attachment Status Scale) の作成と信頼性・妥当性の検討— 九州心理学会第68回大会 ポスター発表.
- 加藤和生 1998/1999 Bartholomewらの4分類アタッチメント尺度 (RQ) の日本語版の作成 認知・体験過程研究, **7**, 41-50.
- 加藤隆勝 1987 青年期の意識構造・その変容と多様

- 化 誠信書房.
- 松井 豊 1990 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, 33, 355-370.
- 中尾達馬・加藤和生 2004 “一般他者”を想定したアタッチメントスタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5, 19-27.
- Shaver, P.R. & Hazan, C. 1988 A biased overview of the study of love. *Journal of Social and Personal Relationships*, 5, 473-501.
- Simpson, J.A. 1990 Influence of attachment styles on romantic relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 971-980.
- 託摩武彦 1973 恋愛と結婚 依田新ほか(編) 現代青年心理学講座 5 現代青年の性意識 金子書房 141-193.
- 渡辺 登 2002 よい依存, 悪い依存 朝日新聞社.
- Zeifman, D. & Hazan, C. 2000 A process models of adult attachment formation In W. Ickes & S. Duck (Eds.), *The Social Psychology of Personal Relationships* (pp.37-54). Chichester: John Wiley & Sons, Inc.

Which type of the person persists in his own romantic partner?
—From the viewpoint of attachment theory—

SHO KATAOKA (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)

NAOKO SONODA (*Department of Psychology, Kurume University*)

Abstract

This study examined the relationship between those who persist in their own romantic partner and their attachment styles with a measure of *persistence* for romantic partners in adolescence. Subjects were 123 university students (70 women and 53 men). Analyzing the scale of the tendency of persisting in the romantic love, which consists of 25 items, the following two factors were found: ‘relational anxiety’ and ‘romantic partner-centric’. Then, subjects were classified into 4 attachment styles by using the scale of attachment styles for general others (ECR-GO), which is revised to romantic partners and consists of 30 items, and we compared the score of ‘relational anxiety’ with that of ‘heart of romantic partners’. the ‘preoccupied’ person were the most persistence in a romantic partner and that the ‘dismissing’ did the least persistence in a romantic partner. In addition, the comparison between the ‘fearful’ and the ‘secure’ led to no difference in ‘heart of romantic partner’. However, ‘relational anxiety’ of ‘fearful’ was higher than ‘secure’. The results indicate that the differences of attachment styles made it possible to estimate the degree of *persistence* in romantic partners.

Key words: attachment styles, persistence of romantic love, adolescence